

障がい当事者に接するうえで大事な視点

連載
NO.2



株式会社くらしケア
ホームページ <http://www.kurashicare.co.jp/>

わが子を思うあまり、つい厳しいことを言ってしまう親御さんがいます。障がいの有無に関わらず親であれば無理もないと感じます。

さて。近年の障がいに対する考え方は「医学モデル」から「社会モデル」に変化しました。医学モデルは「障害や病気は自己責任であり個人が努力して乗り越えるべき」との考え方。社会モデルは「社会のあり方が障害を生み出しており解決は社会の責務」という考え方です。前者は「段差があれば自分で乗り越えましょう」で「後者は段差があればスロープを付けましょう」と例えるとわかりやすいかもしれません。

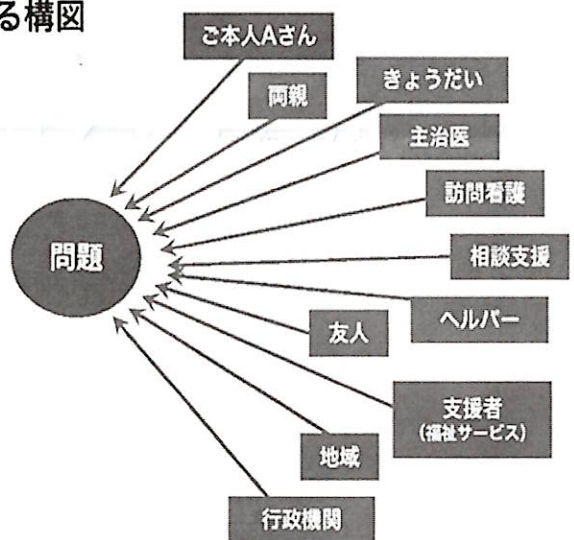
私が障害者になった1980年代は医学モデルが主流でした。振り返れば私の人生は医学モデルに苦しめられた人生だったと思います。近年、車椅子などの身体障がい者が地域へ出やすくなったのは社会モデルの普及によるものです。しかし「心のバリアフリー」に関してはまだまだと言わざるを得ません。偏見などにより生きづらい社会が続いていますので啓発が必要だと感じているところです。

社会モデルの普及に伴い、障がいは「ある」から「持つ」に変化してきたように思いますが、障がい当事者(子を含む)に接するうえで大事な視点をお伝えします。それは問題の中心は「人」ではなく「問題」ということです。先述の「わが子を思うあまり・・・」は人を中心に置いていることが少なくありません。中心に人を置いてしまうと余計に本人もご家族も苦しむことになり解決に近づくことはいっそう難しくなります。問題を中心に置いてください。そして障がい当事者も一緒に考えることが重要です。この視点は意思決定できる、できないは関係ありませんし、親なきあと問題を考える上でも非常に重要な視点だと思います。大切な人の「問題」を、一緒に「持って」差し上げてください。

ありがちな構図



皆で考える構図



『本人に問題がある』ではなく、『障害に問題がある』ととらえる

親なきあと問題の本質と課題について

「親なきあと問題は何かから手を付けたら良いのかわからない」「勉強しているがなかなか前に進まない」との声も少なくありません。今回は親なきあと問題の本質と課題について書いてみたいと思います。

まず問題の本質は2つあります。1つは「親なきあとのわが子の生活像が描けない不安」です。多くの方がイメージするのはこれではないでしょうか。2つめは「親が抱え込まなければならない事情や環境」で、大きく分けてこの2つとされています。

次に課題整理です。6つあるとされています。1つめは「意思決定の支援体制」、2つめは「生活スキルの不足」、3つめは「日中の居場所の確保」、4つめは「金銭的な問題」、5つめは「緊急時の対応」、最後の6つめは「地域との関係」です。紙面が限られていますのでそれぞれ詳細は別の機会に譲りますが、セミナー等に参加されている方なら何となくイメージが浮かぶのではないのでしょうか。6つのうち「足りていないことを整理して優先順位をつけて対策を考えること」が大切だと思います。

精神障がいや人生の途中から発症し障がい者になることが大半。準備時間が限られている方も少なくありません。時間がないと感じる方は「すべてのことを自分でやらなければ！」と思うのを止めましょう。経験者や支援者のなかから信頼できる方を決める（見つけようとする）と悩んでしまうので決めることを優先したほうが結果的に近道だと思います。

私は「親なきあと問題」という言葉が好きではありません。なぜなら死を連想させるからです。親なきあと問題を考えることは愛情そのもので、親の思いを子ども（と子どもの自立を支える支援者）へ渡すバトンだと思います。バトンは未来へ託すもの。未来には希望が必要です。私は「親あるうちの未来会議」と言い換えようと思っています。未来は明るいほうがいいに決まっています。弊社では社員に「利用者様の明日が待ち遠しいと暮らしの実現」を使命として掲げています。課題を明確にして優先順位をつけましょう。わからないことは誰かを頼りましょう。ひとりひとりの明日が待ち遠しくなる日々を送れるように。心から願っています。

親なきあと問題の全体像

